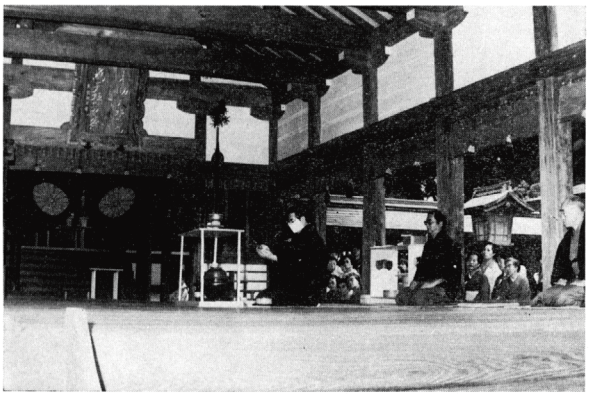
宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像社
〒811 35 福岡県宗像郡玄海町
電話 0940-62-1311代
定価 一年送料共 1000円

神具、装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
九州店 福岡市博多区東公園二一三（〒八一二）電話福岡（〇九二）六五一一九四五六番
本社 京都市下京区油小路六条北入（〒六〇〇）電話京都（〇七五）三四三一三三四一番〜四番

献茶祭斎行

＝表千家家元而妙斎千宗左宗匠奉納＝



筑紫路に漸く秋も深まった去る十月十七日、当大社恒例の表千家宗匠による献茶祭が厳かに執り行われた。

この献茶祭は昭和三十七年十月、当時の宗像大社復興期成会長、出光佐三氏の御尽力により第十三代表千家家元、即中斎千宗左宗匠の奉納が実現したもので、それ以来の恒例行事となっているが、家元直々の御奉仕による定期の献茶祭は九州地区では異例のことであり、茶人待望の秋を彩る最大の行事である。

しかしながら、二十数年の歳月の間に、当大社復興期成会長は出光昭介氏に、家元は第十四代、而妙斎千宗左宗匠へとそれぞれ代は替ったが、敬神の赤心は聊かも変ることなくこの奉納行事は受け継がれ、毎秋十月十七日に盛大に執り行われている。

この日、未明に襲った驟雨も朝方には上って秋空が広がり、境内は清めの雨に洗れて清々しく、献茶祭に相応しい絶好の秋日和となった。

九州、山口各県からは、表千家家元の御点前を間近かに拝見せんものと茶道関係者が早朝より参集し、拝殿周りに特設された椅子席は定刻前にすべて埋まり、立見席も立錐の余地もない状況であった。

勅使館を出て祓舎で祓を了えられた家元一行は、午前十一時拝殿に昇殿着座。拝殿下正面席には、復興期成会長、出光昭介氏（出光興産株式会社社長）、表千家同門会会長、田中丸善司氏（玉屋社長）を始め茶道関係者、また周囲座席には多数の拝観者参列の下、厳粛裡に祭典は開始された。

拝殿にしつらえられた風炉の前で、一糸乱れぬ袱紗さばきも美くしく、淀みない御点前が披露される。斯道最高峯の家元の御点前を間近に接し、その中から茶道の真髄を少しでも汲み取ろうと、この道に精進する人々の真剣な目なざしが家元にそそがれる。満場、寂として声なく、しばしの間静寂の一刻が流れる。

やがて金ぱくの茶碗に濃茶、銀ぱくの茶碗に薄茶がたてられ、神前に供えられた。息をひそめて見守っていた人々の緊張も解け、感激のうちに和やかなざわめきが祭場に広ろがる。

家元を始め、関係者の玉串拝礼が行われ、午前十二時滞りなく祭典を終了した。

一方境内の儀式殿には出光席、斎館には同門会席とそれぞれ副席が設けられ、参列者は両席に臨み、秋の一日、静かに茶の湯の醍醐味にひたった。また、この副席には掛軸や茶道具の逸品が披露されるが、「毎年お道具拝見を楽しみにしています。今年もいい目の保養が出来ました」と、満足気に席を辞す人々が多く見られた。

今年も献茶祭に訪れた人々は千五百名にも及び、境内は和服姿の御婦人方で終日華やかな雰囲気に包まれていた。

論説

千鳥ケ淵墓苑と無名戦士の墓 (一)

千鳥ケ淵戦歿者墓苑が創設されてから今年は満二十五年、その二十五周年を記念する「大東亜戦争全戦没者慰霊祭」が去る十月十八日、同墓苑奉仕会の主催で執りおこなわれた。

千鳥ケ淵墓苑に収納されている遺骨は現在約三十二万二千体。すべて、せっかく祖国に帰ってきたにも拘らず無名（氏名不詳）あるいは無縁（氏名は判っても縁者が見つからない）のため、遺族に届けることのできない遺骨である。当然、それらを安置して祭るのは国の責任であり、また国民としても、この墓苑に誠実な感謝慰霊の心を捧げることを怠ってはならない。終戦いらい三十九年、墓苑設立いらい二十五年の歳月が教えるものは決して少なくない。

○

ただ、創設いらい年を経たためか、無名・無縁の遺骨の収納を独り勝手に解釈し、この千鳥ケ淵墓苑を欧米諸国の「無名戦士の墓」と同性格のものと認識する人々が近年、時折り見られるのは注意を要する。なぜならば、それは戦歿者の慰霊に関して、千鳥ケ淵墓苑が靖国神社と対立的な存在でもあるかのごとき観念を一般に与えかねないからである。

戦後長い間、戦歿者に対して甚だ非礼な言動ばかりしてきた社会党、総評などが、三年前から毎年八月十五日に千鳥ケ淵墓苑に集まり〝戦争犠牲者追悼〟の式典を催すようになっている。朝日新聞によればこの催しは、「靖国神社国営化への反対が、戦死者への慰霊そのものを否定するように受けとられたことなどから始まったという」このだそうだが、そのような俗っぽい政治意図からの追悼慰霊ということが心情的に許せないとともに、靖国神社と千鳥ケ淵墓苑との間にさも対立的関係でもあるかのような認識の見られる点が、甚だ憂慮に堪えない（社会党などの千鳥ケ淵墓苑での追悼式については野田宣雄・京大教授が『諸君！』十一月号で鋭く問題を指摘している）。

しかしもちろん、靖国神社と千鳥ケ淵墓苑との関係が対立的でなどあろうはずがない。そのことは、墓苑創設の時点から政府が、

靖国神社は全戦没者の霊を祀るものであるに反し、「墓」は特殊の事情にある遺骨（無名・無縁のため遺族に引渡すことのできない遺骨）を納める施設であるので…

…両者は観念上も実体も抵触するものではない。

と閣議決定（昭28・12・11）しているとおりである。

（神社新報より）

古式祭の御案内

古式祭とは、今年最後の収穫感謝祭のことであります。

氏神様に対して一年の神恩に感謝して今年の収穫物を捧げ、忌火で焚いた御飯を神様にお供えし、氏子の人達が一緒にいただく神事であります。

この行事は宮中に於いては、陛下が神嘉殿に於いて新嘗祭を行っておられるのと同じ性質のものです。

この古式祭は又「延命招福」の集いともいわれますが、氏神様と共にこの一年間の喜びを分ちあうといった『神人和楽』を共にする年に一度の集会であることに、このお祭の意味があります。

八百年以上の伝統を持つ宗像大社の古式祭には、特にお果子と呼ばれる、九年母・菱餅等で作られた特殊神饌や、江口の浜よりあがるゲバサモという海藻をお供えして、お座を催すのが古来からのしきたりなのです。又くじが行われ、御神像や神盃が授与されます。

是非とも皆様方おさそい合せの上御参拝下さいますよう、御案内申し上げます。

記

一、日　時　十二月十五日（土曜日）
　　祭　典　午前六時
　　お　座　午前六時三〇分〜午前九時
一、場　所　祭典　本殿
　　お座　清明殿
一、お座料　（一名分）
　　白米一升又は金五〇〇円

余滴

この秋も当社の境内は菊の花で埋った。県内はもとより県外各地から菊作り名人の丹精こめた作品が寄せられ、居ながらにして目の法楽をさせていただいた。お蔭でこの十年間、当地方の菊作りの技術は飛躍的に向上した。何といっても、一流のものに接することが最善の道である。

ところで、菊は奈良朝以前に中国から渡来し、はじめは薬用として珍重されたらしい。それが江戸時代の中頃から、花の育成など栽培技術が進み、観賞用として驚くほど多くの品種改良が行われた。そして江戸時代末期になると早くも西洋に輸出されている。日本人の独創になる技術で外国に伝えられ、世界文化に貢献したものは少くないが、菊はその先駆をなすもので輸出文化のトップクラスであった。

徳川三百年の鎖国政策は庶民のエネルギを内に向けて爆発させた。そのはけ口の一つとして植物栽培がとり上げられ、丹念な品種改良が行われたのである。しかも菊作りに精魂を傾けるのは、食用や薬用としてではなく、ただ大輪の花を咲かせ、懸崖の姿を楽しむという風流心からである。こうした先人の努力と伝統的精神を受け継いで今日菊作りは各地で盛んである。しかし、風流とはいえ、この道は大変である。苗づくりから始まって、土づくり、植え替え、施肥、病虫害駆除、灌水、その他、一年中手がかかる。長期旅行は不可能である。「菊づくり、菊見る時は蔭の人」蔭の人の存在に気付いた時、花は一段と美くしく見えてくる。

第二八〇回 宗像大社歌会詠草

中村吾郎 選

毎月末日〆切

大島 板矢あきえ
放生会のチラシ貼られし電柱の長く影曳く浜を帰り来
（評）何でもない処に詩はころがっている。それを捉えるにはその人の純粋性が先行しなければならない。

大島 大島 勝代
百日紅夜毎に露のしげければ散りし梢に再びの花
（評）再びの花を発見したときの感動が直かに伝わる。下句の簡潔な表現に依り格調の高い一首となった。

津丸 古賀 文月
青々と茂りをたるつたかづら色あせて寒き葉ずれの音す
（評）三句以下に晩秋の寒々とした感じが出ているがやはり、一二句はことわりであろう。

深田 中野 節子
クレーン車の運転室にも昼寝しをり日の影寒き道路工事場

自由ケ丘 後藤君代
美しき人のいのちを惜しむ声ききつつすがし坂下りつつ

田久 小方 実
立ち読みの人多き書店に立ちよれば主は漫画の本読み居たり

大島 本田よしえ
竹串に差し干す鰯の残り身は夕餉の膳の一品とする

日の里 清原 絹代
塀越しのうつぎの白花露もてり散りし花殻さけて朝ゆく

原町 中村 幸
椎の木の虚のかまへに仔猫らが時々丸き貌をのぞかす

津丸 藤田 肇
足弱き女の友をおくらかしひとり訪ふ腹切りの岩

原町 八波 五月
その上（かみ）の水車の威容彷彿と「みあれ祭り」の供奉船五百

通り堂 木梨よしの
バス停に乗り捨てられし自転車のかれこれ三月秋雨の降る

徳重 石松や寿子
籾摺の音かろやかに新米の俵は納屋に高くつまるる

吉留 高山 信子
裏木戸を出で入る吾の足もとにふれてほうせん花種子のはじける

田久 立花 勇雄
亡き父の植えし柿の実黄に熟れて吾が七十七の秋深みゆく

武丸 立石ろせ乃
思ふことの直ちに浮かばぬ苛立ちに顔の汗をふき二三歩あゆむ

東郷 藤崎 辰子
ふるさとのとんがり柿のなつかしさ追ひかけて来て兄が呉れたり

福間 広渡一寿軒
放生会のもてなし受けし新米の寿司歯切れよき酢蓮根の味

大島 中村さつき
桃の枝の間を抜くる風ありて果守る蜘蛛はひねもす揺るる

大島 目原 節子
格子戸の古りし屋並のうち続く赤間宿跡見つつし過ぐる

田熊 鷲津かつ代
表より呼ぶ友のこゑに幼子はあたふたと箸をおきて出てゆく

田熊 力丸 一郎
飛騨土産の串にさしたる五平餅焼けば匂ひの香ばしく立つ

王丸 小方 正人
笹の上に滴る汗を拭きもせず刈り進む孫のたくましき腕

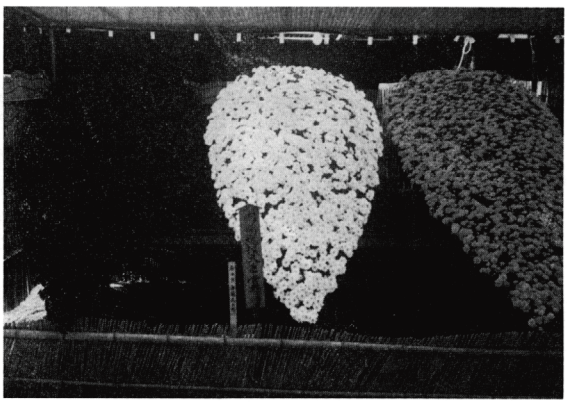
王丸 村山 菊代
間引きせる青菜をまめに束ねいる庭辺豊かに秋陽の満つる

第14回

西日本菊花大会盛大に開催

九州各県山口より三千余鉢の菊花

内閣総理大臣賞
懸崖部門　海藤義太郎氏



当大社の遷宮祭を記念して開催される、西日本菊花大会も今年で早くも第十四回を迎えた。

本年は菊作りにとって夏季の猛暑、小雨という近年まれに見る悪条件にもかかわらず九州各地より三千余鉢の見事な菊花が出品展示された。

菊花は十月二十八日を中心に搬入され、協力・後援会社提供のトラック四十余台により九州各地より集荷された。二十八日当日は社団法人宗像青年会議所（大竹善雄理事長）二十余名の奉仕により菊花の荷下し、展示場の整備がなされ一日の開会を待つばかりとなった。

十一月一日奉納菊花展奉告祭が本殿に於いて斎行され、栗山審査長・高原会長を始め関係者一同参列し開会を祝した。開会式に引続き審査会が行われ、栗山審査長・松川・小林・近藤・吉田・斉藤・岡部各審査員以上七名より厳正かつ公正な審査が終日行われ、総理大臣賞を始め一五三本の特別賞及七八本の入選が決定した。

審査は、大輪十二鉢盆養花壇・盆栽三鉢花壇・懸崖三鉢花壇・福助三鉢花壇・総合花壇・特別競技福助一鉢A・全菊連指定花「近松の里」特別競技B・今回新設された、大輪だるま作り五鉢花壇・小品盆栽五鉢花台付花壇を加え九部門にての出品となり各々の一位から最下位迄の順番が決定し審査長より事務局に提出された。この答申に基づき特別賞の配分が行われ後述の通り各賞が最終決定したが、特に懸崖大作三鉢組は十六組出品され懸崖日本一宗像大会の名を一段と上げる見事な作品が展示場を飾った。審査員合議により全員一致で本第十四回西日本菊花大会最高位内閣総理大臣賞は懸崖部門第一位海藤義太郎氏に決定した。尚各賞受賞者名は次の通りである。

内閣総理大臣賞
春日市　海藤　義太郎
農林水産大臣賞
鳥栖市　時田　義光
文部大臣賞
遠賀郡　高島　雪茂
通産大臣賞
宗像郡　吉田　耻
運輸大臣賞
宗像郡　寺島　久太郎
内閣官房長官賞
春日市　船越　順一
科学技術庁長官賞
宗像郡　小沢　新助
環境庁長官賞
熊本市　松浦　雄二郎
宗像大社宮司賞
門司区　佐野　功
福岡市　井ノ口正夫
武雄市　坂本　正記
〃　橋口　武夫
九州農政局長賞
福岡市　石松　正広
福岡県知事賞
中間市　橋本　虎三
熊本市　後藤　美登利
門司区　池上　福元
八幡西区山崎　正親
佐賀県知事賞
福岡市　石橋　善治
熊本県知事賞
武雄市　橋口　武夫
長崎県知事賞
遠賀郡　高島　雪茂
福岡県議会議長賞
佐世保市橋本　義弘
宗像市　高山　包夫
小倉南区呉屋　太郎
武雄市　宮地　隆治
福岡県町村長会会長賞
佐世保市井手　梅作
糸島郡　吉富　英夫
福岡市　江藤　昌信
宗像市　宮小路喜彦
福岡県町村議会議長会賞
福岡市　隅田　博
福岡市　谷口　小太郎
遠賀郡　原田　清和
粕屋郡　高原　鹿吉
福岡県教育委員会賞
八幡西区井上　辰夫
八幡西区池田　昭
小倉南区川端　七次郎
八幡東区前野　ますえ
門司鉄道管理局長賞
三井郡　高山　勉
八幡西区高椋　良和
全日本菊花連盟賞
田川市　植木　茂
佐世保市浜田　三郎
九州山口花卉園芸連合会賞
小倉南区清家　仙三
八幡西区田中　康道
門司区　駒山　直次
武雄市　坂本　寿一
九州花市場連合会会長賞
佐世保市横道　藤人
八幡西区千々和正信
武雄市　橋口　武夫
小倉南区鈴木　輝夫
福岡県農協中央会賞
粕屋郡　矢野　定
宗像郡　篠原　久雄
熊本市　吉田　剛
宗像郡　吉田　耻
福岡県観光連盟会長賞
小倉南区鍋山　豊
門司区　佐野　功
糸島郡　大原　秀雄
熊本市　後藤　美登利
福岡農林事務所賞
宗像郡　中村　正
佐世保市橋本　義弘
宗像郡　中野　忠雄
春日市　海藤　義太郎
田川市　植木　茂
宗像郡　花田　巌
福岡県花卉市場協会会長賞
佐世保市堤　勇孝
宗像市　最所　孝子
佐世保市石橋　政利
熊本市　牛島　正人
粕屋郡町長会会長賞
宗像郡　吉武　皐月
福岡市　斎藤　新
遠賀郡町長会会長賞
小倉南区車石　裕
武雄市　松尾　為夫
宗像郡町村長会会長賞
武雄市　坂本　生記
小倉南区村井　猛男
宗像郡　中山　繁樹
小倉南区福田　親晴
佐賀県　古賀　敏弘
福岡市　宗　秋夫
福岡市　大河内サナエ
田川市　植木　雪子
宗像郡町村議長会会長賞
八幡西区山崎　正親
直方市　穴井　利之
佐世保市大串　末一
宗像郡　島田　安次郎
遠賀町長賞
門司区　池上　福元
遠賀郡　広渡　一冨
古賀町長賞
福岡市　牛尾　正敏
宗像市　坂田　久
宗像市長賞
佐世保市溝口　勇三
福岡市　石橋　勝
津屋崎町長賞
春日市　原　カチョ
佐世保市井手　梅作
福間町賞
若松区　谷崎　勇
遠賀郡　本田　国雄
玄海町長賞
小倉北区鈴木　輝夫
八幡西区波多野松男
飯塚市　辻野　好房
八幡西区柏木　雪幹
福岡市　吉田　吉之助
若松区　伊達　学
粕屋郡　阿部　一吉
武雄市　松尾　為夫
大島村長賞
宗像郡　高橋　民夫
福岡市　箱島　春男
宗像大社菊花会会長賞
宗像市　古川　明
粕屋郡　阿部　一吉
八幡西区阿部　武男
小倉南区木村　平八郎
宗像郡　井上　喜三
〃　楠　理
遠賀農業協同組合長賞
宗像郡　綱脇　倉子
八幡西区西　宏
宗像農業協同組合長賞
宗像郡　寺島　久太郎
宗像郡　緒方　ヨシエ
粕屋郡　石田　御年
田川市　植木　雪子
津屋崎町商工会長賞
八幡西区高田　太助
宗像市商工会長賞
粕屋郡　岩井　光利
福間商工会長賞
宗像郡　田中　和代
玄海町商工会長賞
粕屋郡　青谷　貞五郎
大島村商工会長賞
粕屋郡　石田　御年
宗像大社氏子会長賞
飯塚市　宇佐波　近
小倉北区斎藤　辰次
宗像郡　中村　正
〃　辻　五男
玄洋福岡ライオンズ賞
小倉南区田中　弘
遠賀郡　高椋　良枝
粕屋郡　長崎　弥太郎
小倉北区田中　定吉
神湊旅館組合長賞
嘉穂郡　川崎　正木
宗像郡　高橋　民雄
若松区　谷崎　勇
田川市　平野　春夫
宗像青年会議所賞
直方市　静岡　幸弘
八幡西区樋口　福男
小倉南区竹内　雪豊
宗像地区商工青年部長賞
宗像郡　岩佐　繁樹
〃　田中　重久
八幡東区前野　ますえ
飯塚市　田代　定
奉納特別賞
遠賀郡　高島　雪茂
小倉南区竹内　雪豊
田川市　桜木　為夫
八幡東区前野　ますえ
以上

錦秋の神賑行事
アラカルト

西日本菊花展の大輪、懸崖が競う当大社の十一月の境内には、日々神賑行事が催され賑わいを見せている。これらの行事は昭和四十六年十一月十一・二の両日に斎行された「宗像大社遷宮祭」を記念して行われる諸々の行事である。

今年も澄み渡る秋空のもと、三日の剣道大会、詩吟剣舞の大会を始めとして、八日の大正琴・舞踊、十日柔道大会等が催された。これら諸行事の賑わいを取材して見た。

第十四回 奉納剣道大会

雲一つない天高き三日、午前七時頃より続々と、竹刀に防具袋を背にした少年剣士等が境内に集まって来る。宗像地区を中心に各剣道教室、道場からの参加者は、青少年、男女剣士七〇〇名と聞く。

午前八時本殿横広場は参集した選手、父兄、指導者関係の人々で埋まった。花田新太郎剣連宗像支部長の挨拶に続き、高段者二名による「日本剣道の型」が演じられ、又居合道の型等が披露された。式典を終り九時より試合は開催された。

当大社の剣道大会は、古来より、実戦試合として有名で、野試合である。

板ばりの道場で、設備のととのった体育館等で日常練習している剣士等も、砂利敷の露天で砂ボコリの中で行うこの試合はカッテが違い、面の中に流れる汗をぬぐいもやらず、とまどいを見せていた。昼食時間も取らず敢行された試合も、早い秋の落日が境内の樹々間にかたむく午後四時半頃終了した。成績は次の通りである。紙面の関係上優勝、準優勝のみ記す。

小学生の部（男子）
一年
優勝　小門　賢悟（神興東）
準勝　二宮　康之（玄辰館）
二年
優勝　磯部　真治（玄海）
準勝　柳瀬　謙作（日里東）
三年
優勝　井上　公史（東郷）
準勝　花田　泰彦（河東）
四年
優勝　船越　英明（玄海）
準勝　嶺　公司（東郷）
五年
優勝　本田　達也（岬）
準勝　岩永　徹哉（玄海）
六年
優勝　安部　継彦（池野）
準勝　吉田　隆史（岬）
中学生の部（男子）
優勝　大和　隆治（中央）
準勝　山本　義雄（城山）
三位　村山　正浩（玄海）
高・大学の部（男子）
優勝　小森　康敬（宗高）
準勝　山口　賢二（東海）
三位　江口　周介（東海）
一般の部（男女混合）
優勝　永野　義隆
準優　内田　光子
三位　永野　寿和
小学一・二年の部（女子）
優勝　長谷川佐江子（河東）
準勝　金丸　由美（玄辰館）
小学三・四年の部（女子）
優勝　下村有希恵（河東）
準勝　大川　友子（河東）
小学五・六年の部（女子）
準勝　山崎美佐子（河東）
準勝　広橋美由紀（岬）
中学・高校の部（女子）
優勝　森塚　智子（玄中）
準勝　烏丸　律子（宗高）
以上

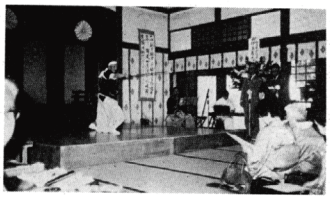
第十一回 奉納吟剣詩舞大会

同日、清明殿に於ては第十一回奉納吟剣詩舞大会が開催された、これは熊本市に本部を置く、清香吟社（会長益中鵬山）社中会員が中心となり毎年開催されているもので、今年早くも十一年目を迎える。

三々五々参集した会員の人々は、心字池のほとり、又、木立にたたずんで最後の練習に余念がない。

午前八時半、拝殿に於て会長益中鵬山氏の奉吟があり、一同正式参拝のあと大会は開催された。

会場を埋めた人々は、美声、美舞に時を忘れ、拍手と声援は終日会場に満ち満ちていた。大会終了後、功労者に対し、会長より感謝状が贈られた。功労者名は次の通りである。



（熊本県）
宮崎　透山
河野　賢山
（宗像郡市）
灘谷　喜月
安部　絅月
安部　城山
中村　黄月
以上

大正琴・舞踊歌 奉納発表会

八日、正午より清明殿に於て、郡市内の有志による大正琴、舞踊歌の発表会が催された。これは宗像郡市内の高令者の人達で大正琴を愛好されているグループが多くあり、一度発表会を行いたいとの申込を受け、当大社の菊花展中の一日を観菊会をかねて楽しんでいただこうと、今年始めて開催されたものである。

出演者は、各市郡内のグループと、藤間秀久輝、めぐみ同好会の人々による舞踊、歌からなり五十七曲からの曲目が演奏された。

柔道大会

市・郡内の中学校より選ばれた八十名の選手による、地区柔道協会（会長・田中駒雄）主催の奉納大会が十日土曜日午後一時より、玄海中学校体育館に於て開催された。

今年の大会は当日朝より雨模様の天候なので急遽会場を大社境内露天会場より体育館に変更しての試合運びとなった。

この大会は、市郡内の中学校一・二年の選手による団体、個人トーナメント戦で優勝を競うもので、来年度の各校柔道部リーダーを選ぶ意味からも内容的に各校が注目する試合である。熱戦を重ねた結果は次の通りである。

（団体戦）
優勝　津屋崎中学校
二位　福間東中学校
三位　福間東中学校
（個人戦一年生の部）
優勝　村山和浩（福間東）
二位　西村　真（〃）
三位　古賀雄司（城山中）
（個人戦二年生の部）
優勝　西野健太（津屋崎中）
二位　鈴木箸二（〃）
三位　田川健二（福間東）
以上

九州考古学の重鎮
鏡山猛氏の逝去を悼む
═ 享年七十六歳 ═

古代史における、宗像大社の置かれた重要な役割を知る上で、大いなる手がかりとなる沖ノ島の調査等にあたられた、九州大学名誉教授鏡山猛氏（七十六歳）が十月二十四日午前六時三十分逝去された。ここに慎しんで哀悼の意を表します。

先生は、旧制小倉中学・旧制福岡高校を経て、昭和六年九州帝国大学法文学部卒業、九年同助手、十一年同講師、二十七年九州大学文学部助教授、三十三年九州大学に考古学講座が創設されるとともに初代教授となられた。四十七年三月定年退官、同年五月名誉教授となられ、太宰府に新設の九州歴史資料館初代館長に就任、五十六年三月まで務められた。

この間、昭和四十年にフランスとの学術交流を深めた功績でレジョン・ドヌール勲章を受賞。四十七年九州の考古学に尽くされた功績で西日本文化賞を受賞された。

先生は九大在学中の頃はまだ我が国の考古学界も草創期であったが、いち早く九州考古学会を結成され、九州一円の調査・研究を統括されるなど学会のカナメとして大きな功績を残された、九州の考古学界の最長老である。

御自分のライフワークとして、古代都市太宰府の研究に取り組まれ、昭和四十三年に「太宰府都城の研究」を刊行された。これは、太宰府研究の最高峰として評価されている書籍である。

一方当大社では、宗像大神信仰の重要な根源であり〝海の正倉院〟と称される沖ノ島の本格的な学術調査を企画し、九州の考古学界の中心である故鏡山猛氏に現地の責任者を委任した。昭和二十九年五月から昭和四十四年から四十六年までの第三次調査では顧問として協力されている。この沖ノ島祭祀遺跡調査は、日本の考古学研究史上の一ページを飾ざり、全国民の耳目を集めたことは衆知のとおりである。

先生を失った今、ただただ御冥福をお祈りするばかりである。

福間町消防団
「全国消防操法大会」で活躍
小型ポンプの部で見事八位に入賞

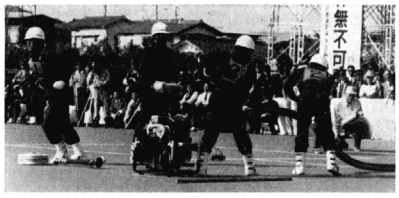
去る十月二十一日、神奈川県横浜市の消防訓練センターに於いて、第九回全国消防操法大会が行われ、福岡県代表として福間町消防団が出場、小型ポンプの部で第八位に入賞した。

この小型ポンプの部は一般に「ポンプ操法」と称され、消火活動の基本を競うものである。競技方法は四名で一チームを編成、防火用水を想定し、ホース三本を使用して、給水から消火活動の放水、更に放水を終えホースを収納する迄の時間、節度、正確さ、チームワークなどを競う。あくまでも競技ではあるが、実際の場合はそれこそ秒を競うものだけに、四名の一致団結した力、又迅速かつ正確で一糸乱れぬ行動が要求される。競技時間はおよそ三分間であるが、一つ一つの行動は全力疾走で行い、その時間にすべての操法を行うことから、この競技には体力・精神力が要求される。その為にも日頃のたゆまぬ訓練が、競技会へ臨んだ時に実力を発揮する原動力となる。

福間町チームは、先ず八月五日に行われた宗像地区大会で優勝、地区を代表して九月二日に行われた福岡県大会へ出場、日頃の訓練の実力を遺憾なく発揮してこの大会にも優勝し、全国大会出場の権利を手にした。この優勝迄にも相当の訓練を重ねたが、今度は全国大会に福岡県代表としての出場だけに、以前にも増して厳しい訓練を積んだ。いよいよ全国大会である。

当日宗像大社より授与されたお守を胸に競技に臨んだ。これ迄重ねに重ねた厳しい訓練の結果を発揮する時である。わずか三分間という短い時間にこの一年間の結果が出るのである。四名が一致団結、全力で操法競技に臨んだ結果、見事八位に入賞、福間町消防団は全国大会入賞という栄誉を手にしたのである。

福間町消防団の全国大会での活躍は、地区消防団にとっても大きな励みとなるものである。全国大会の入賞をお祝い申し上げると共に、今後の益々の御活躍を祈るものである。



今年も菊花を寄贈
═ 近郊の福祉施設へ ═

当大社の境内に、大輪、懸崖などの菊花が展示され、多数の参拝者で賑っているが、この見事な菊を今年も近郊の社会福祉施設に寄贈した。

今年の寄贈先は、津屋崎町の特別養護老人ホーム津屋崎園、宗像市の社会福祉法人くすの木園、粕屋郡新宮町の福岡県立養護学校の三施設である。この福祉施設への菊花の寄贈は、昭和五十五年に当大社にて開催された、第十六回全日本菊花大会の折に、全国各地より出品された見事な菊花を、出来るだけ多くの人達に観賞していただこうと、県内各地の福祉施設へ寄贈したところ、皆様より大変喜ばれた。翌年には宗像大社菊花会々員の有志より、寄贈用菊花の奉納があり、今日迄毎年寄贈を行っている。

寄贈の菊花は福助という一輪咲きの菊花で、丈も低く室内に、又ベランダにても置ける、観賞に手頃な鉢植の菊花で、花の香が周囲に漂い、花の美しさと相俟って心の安らぎを覚える。今年は、この福助が有志のクリスマスが来たようで、花を楽しんだ後には地におろし、うまく苗がとれれば、来年は全員で菊づくりに挑戦してみたい」と大変感謝された。

当大社も菊花展の続く限りこの寄贈を続けて行きたいと思っている。

〝鉄戈〟の出土を見る
弥生時代の遺跡

去る十一月十二日宗像市名残の冨地原「梅木遺跡」で、弥生時代中期（二〇〇〇年前）の土壙墓（どこうぼ）から、鉄製武器の一種である鉄戈（てっか）が副葬品として出土した。

この鉄戈は、長さ二十九センチ、巾五・五センチ、厚さ〇・三センテの小形で細形を呈し、中原遺跡（唐津市）や三床遺跡（糸島郡）の出土鉄戈と同様に国産初期の段階の鋭利な刃物である。鉄戈は長い柄に鋭角に着装し、使用した戦闘具である。鉄器文化は、弥生時代前期に青銅器文化と相前後して大陸・朝鮮半島より日本に移入されたものである。

銅戈がカメ棺に副葬された状態で出土した須玖遺跡（春日市）は著名であるが、北部九州での鉄戈の出土は、十数例を数える。宗像地方では今回が初めての出土であるが、宗像が弥生期すでに大陸との交通の要地として文化圏を確立していたことも考えられそうである。この時期に銅剣・銅鉾等も同時に大陸より将来されるが、時代が下がるにしたがい、刃身が巾広となり、武器から祭祀用品へと移行していった。

この地域一帯は、丘陵部と平坦部とに広がる遺跡群をみる。弥生時代の住居址や集団墓から、古墳時代に至る永い年月にわたり形成されてきた古代を知る上での複合遺跡である。調査が進むにつれ宗像地方の、当時の社会共同体解明の一助となりうる。

【授与品紹介】

車輌用御守 (6)
◇ビニール水引守（みずひきまもり）
── 当大社交通安全守札として最初に調製されたお守札です ──

この「ビニール水引守」は、ビニール袋に紅白の水引きを繋いだお札を納めている仕様から「ビニール袋入水引御守札」が正式の名称であります。

ビニール水引守は後に紹介する「木札守」と共に、当大社御祭神の神徳・神威が交通安全守護神として、広く人々から崇敬をうけるようになった時、御祭神の御神璽（ごしんじ）＝神様の代りの証しとなる＝として調製されたお守札です。現在、参拝者の皆様に授与致しております交通安全お守札の中で、最も古くからある守札であります。

又、石油を原材料として開発された、ビニール製品をお守札に用いたのもこの守ります守札の中では、最もオーソドックスなお守であります。

ビニール水引守の仕様は、古くより授与されております「おふだ」（伊勢の神宮の大麻＝天照皇大御神・豊受大御神の御神威をこめた、神殿にお祀りするお札＝が最も古くからあり、全国各神社でも後世になって調製するようになった。）をタテ一二・四糎、ヨコ四・六糎、厚さ〇・三糎に小型化したものに紅白の水引を結び、硬質のビニール袋に納め、四方を熱処理加工で密閉しています。上部二ケ所にハト目穴をあけこれに朱糸の練合せ緒を通した車内吊下式のお守札であります。現在授与致しております守札の中では、最もオーソドックスなお守であります。

ビニール水引守の初穂料は左記の通りです。

一体　八〇〇円也

──◇──◇──

※お車の交通安全祈願祭とお祓をご希望の方は授与所受付にお申し出下さい。

祭典初穂料は次の通りです。

一、大型車・特殊自動車
一台　五〇〇〇円也
一、普通車・軽自動車
一台　四〇〇〇円也
一、自動二輪車・軽車輌
一台　三〇〇〇円也

※祭典を申し込まれました方には、
一、交通安全守札一体
一、安全ステッカー一体
一、神宝館拝観券一枚
一、撤下供物
を無料にて授与致しております。

※遠方にお住いの方、参拝不可能な方には郵送による交通安全祈願の祭典並に交通安全守札授与の受付を致しております。

詳細については左記へお問合せ願います。

〒八一一─三五
福岡県宗像郡玄海町田島
宗像大社々務所
祭儀部賽務課
TEL（〇九四〇）六二─一三一㈹

以上

雑記

今年も残すところあと一ケ月ばかりとなった。歳月が経つのは早いもので、いつの間にか一年が過ぎようとしている。北国では冬将軍の到来に備え、冬仕度が着々と準備されつつある。神社に於いても正月の準備でいっそう忙しくなる時期でもある。この頃になると商店街にはクリスマスツリーが飾られ、人々がいつになく足早に感じられ、月も師走と呼び、この月を境にして新たな年となる。我々の祖先はこのことを何千回何万回と経験して来た。しかし何度経験してもそこにはほど良い緊張感、興奮というものが生じる。また、この時期は神も人も新しく甦る準備期間であるともいえる。言いかえれば旧き年を送り、新しき年を迎える為の時期であり、それは大晦日に行なわれる大祓で一年間の一切の罪を祓い、新しい年を迎える、つまりケの状態からハレの状態へとこの日を境にして神も人もいくことを可能にしてきた。

このように自然を大切にし、畏怖して生きてきた我々の祖先が、草木の古い葉を落とし、新しい芽を吹くという自然摂理から得た知恵が日本人の生命観であるといえる。

都市化の波や核家族化が進みつつある今日、多くの人々に新たな生命の甦りの意を解し祖先の教えと神の道を知ってもらいたいものである。

その践祚大嘗祭は、天皇という大生命の再生更新をはかる一世一代の神事であり、この儀式は現代に生きている重要な神道の根をなす神事である。また二十年毎に行なわれる神宮の遷宮も同様で、絶えず甦りを繰り返すことによって、永遠に生命の維持を保持していくことを可能にしてきた。

このように自然を大切にし、畏怖して生きてきた我々の祖先が、草木の古い葉を落とし、新しい芽を吹くという自然摂理から得た知恵が日本人の生命観であるといえる。

都市化の波や核家族化が進みつつある今日、多くの人々に新たな生命の甦りの意を解し祖先の教えと神の道を知ってもらいたいものである。

宗像大社歌会 俳句作品集（二六一）

八幡西　磯谷　緑雨
ひょっこりと庭に咲き出し彼岸花

田熊　安部　ゆき
貝割菜喜寿祝はれし椀に浮く

香椎　板矢クニコ
浪がしら立たず玄海鯖雲

津屋崎　西住喜三郎
裏阿蘇の秋を見に発つ菊日和

福間　広渡一寿軒
満腹の雀憩える稲架の上

福岡中央力丸ゆずる
選びけり銀杏黄葉の栞にと

田熊　力丸一郎
奥飛騨に迅む瀬音の秋澄めり

藤沢　井上　玄洋
飛び立ちて行方は知らず芒の穂

津屋崎　井浦　良介
木の実拾う髪柔らくして吹かれ

玄界沿岸地名探訪（9）

宗像郡玄海町鐘崎（1）

いしいただし

鐘崎といえば、沈鐘伝説と海女の二つが知られています。

沈鐘伝説は、その昔、朝鮮から巨鐘を運ぶ途中に、ここで風浪の為に、海中に落ち沈んでいるというものです。

海女は発祥の地として、ここから対馬、更に日本海を北上し、石川県能登半島まで活躍したとされるものです。共に民俗学的に広く知られているところです。

この鐘崎の地名については、古くから文献にその名を残しています。

八世紀中葉に編纂された万葉集巻七の読人知らずに、「ちはやぶる金の岬を過ぎぬとも我は忘れじ志賀の皇神」（七・一二三〇）。金の岬は金え三崎、鐘岬等とも記します。この歌は、航海の難所、金の岬沖通過の安全を、志賀の神に祈ったものです。

また続日本紀には、「神護景雲元年※（七六七）、宗像郡大領、宗像朝臣深津、授外従五位下、其妻無位竹生王従五位下、並以被僧寿応誘、造二金崎舟瀬一也」に見えます。これは金崎に舟瀬を築いたために、朝廷より位を授けられたものです。

少し時代は下りますが、類聚三代格の寛平五年※（八九三）の大政官符に「筑前国宗像郡金崎・賤一六人、正丁充二大和国宗像神社修理料一」。金崎から一六人の丁正が大和国の宗像神社修理にあてられているのが見えます。

これらカネ（金・鐘）が何に由来したものか。地名でのカネは「曲ったもの（ところ）」の例が多いといわれます。

カネが地形か、または金や鐘とつながりがあるのか少し考えてみましょう。

金ノ岬（鐘ノ岬）は、町の北に位置し、標高五二メートルの山で、かつては島であったものが、砂洲によって結ばれた陸繋島で、既に万葉に詠まれた時には、陸つづきの岬となっていたのです。

玄界・響灘に突き出た独特の形をし、玄界側（宗像郡玄海町五月松原）からみると釣鐘状に。また響灘側（遠賀郡岡垣付近）はやや形がなだらかで饅頭状を呈しています。見る位置によって岬の形状が異っているようです。

岬は地ノ島と対峙し、その間の海は曽根（暗礁）と呼ばれ、玄界有数の難所でもあります。岬は別名を「佐屋形山（さやかたやま）」とも称され、金ノ岬の名と共に多く古歌に見られます。古くは金ノ岬が多いようです。この岬に式内社、織幡神社が鎮座しています。御祭神は武内宿禰、志賀大神、住吉大神、壱岐真根子命。

織幡の名は、神功皇后三韓出兵の際、武内宿禰が赤白の旗を織って竿につけたことに由来するといいます。

織幡の語源は不明ですが機織（はたおり）との関係が考えられ、大陸・半島文化の渡来が、神功皇后伝説とも絡んで伝説になったとも推察されます。これについては、後に述べます。

さて、この沖に沈鐘伝説があるのですが、柳田国男は次の三点に伝説を分類しています。

① 大寺院の伽監がある時代に地変で陥没し淵となったもので、郷土を古く栄えたことを説くためのもの。

② 鐘に霊があり、盗賊や兵火の難を脱し、水底に転げ込んだという名器伝説。

③ 仏典からの出所で龍神の物語があり、水の神の祭場とするもの。

鐘崎の沈鐘伝説を考える場合、龍神物語は別としても、ここが航海の難所であり、「水の神の祭場」を考えるのは面白いと思います。

この沖に沈む鐘を引き揚げる試みは、室町時代に宗像氏が、江戸時代に藩主黒田氏が行ない失敗。大正末に成金が、当時の金で十数万円を投じ。引き揚げたのは、鐘の形をした巨岩でした。今、織幡神社の入口付近にこの巨岩は置かれています。

（つづく）

保存に関する事業沿革（下）

昭和四年（一九二九）に制定された「国宝保存法」は、明治以降に法令化がなされてきた文化財に関するすべての規則等を統括した法律であった。しかし、それ以前の法的規約と同様に古代から永い年月伝えられてきている、伝世品である美術工芸品や、建造物が保護の主体であったことは言うまでもない。

従来どおりの旧家・社寺が所有している多くの物件が、改らためて国宝に指定されるとともに、国宝指定の規程条件の範囲も広がった。この法規制により、我が国が古来より伝える文化財の、諸物件が海外に流出していくのを防ぐことが出来ようであり、このことは、その時期の国際状況も考えると、特筆すべきことであったと言える。

大東亜戦争終結後、これらを整理することが生じてきたので、昭和二十五年（一九五〇）五月「文化財保護法」が新たに施行され、文部省の外局として文化財保護委員会が設置された。従来の国宝を解消し、「重要文化財」と改めたが、以後重要文化財の中でも特に価値が高いものを、国宝に指定している。

それより以前の大正八年（一九一九）四月に、「史蹟名勝天然記念物保存法」が制定され、自然科学系の方面でも、太古の環境がそのまま存続している所在地は国が指定し、保存に力をいれてきている。沖ノ島全島も天然記念物原始林として大正十五年（一九二六）十月に指定を受けた。

宗像大社においても、戦後の混乱期が去った昭和二十六・七年頃から、古代の宮域を再興し、郷土の文化の姿をととのえ原点に復すべく境内整備事業から着手した。

昭和三十四年四月宝物館建設事業に着手

昭和三十七年二月六日付けで、文化財保護委員会より「重要文化財の管理団体」としての指定を受ける。

昭和三十九年十一月文化財保護委員会より沖ノ島出土「祭祀神宝」の全面返却を受く。（第1次・第II次沖ノ島調査による出土遺物が、宝物館完成まで国が預かり保管している。）

昭和三十九年（一九六一）十二月二十九日宝物館開館一般に公開す。

この間に、宝物館開館事業の目的の一つでもある、郷土資料の保存・保管に関して多くの方々の協力を得てきた。又、沖ノ島調査と併行して、宗像地方の考古資料の調査整理も続けていった。永い間個人で所有されていた物点や、各所で収蔵の文化財の寄贈・委託もなされている。この中でも、主なる物件をここに上げてみると、

昭和三十九年十一月二十九日

重要文化財　色定法師一筆一切経四三三一巻（玄海町興聖寺　蔵）

昭和四十四年六月六日重要文化財　仁平四年銘有、滑石製経箇一口（宗像市稲元校区　蔵）

昭和四十五年七月十一日福岡県指定　釈迦如来立像一躰（清涼寺式・津屋崎町円通寺　蔵）

昭和四十七年三月七日福岡県指定　永享十二年銘有、釣鐘一口（津屋崎町縫殿神社　蔵）

ここで昭和三十九年に開館した宝物館の構造を簡単に述べる。宗像大社境内は、この地方最大の河川である釣川に隣接しており、この宝物館は、その底湿地帯側に建設された。まず水の害から守るために地表を二メートル高める埋め立て工事から行ない、なおかつ収蔵品に着く湿気をふせぐために床面を一・五メートル揚げた高床様式としている。延べ面積二〇〇坪からなる建物の内に、展観室・収蔵室・調査室・資料室等をコンパクトにまとめあげ、各室を各々個別にし、空洞の二重壁でおおい、天然自然の条件の防湿構成となっている。

昭和五十五年開館の神宝館やその間の調査活動及び文化財の保存工事に関しては次号で述べよう。

宗像むかし話（二）

青柳種信の瀛津島（おきつしま）「防人日記（さきもり）」（二）

筑前の国学者青柳種信が寛政六年に藩務を帯びて沖ノ島に往来した日記が、標題のものである。先頁においては彼が渡海し、約二カ月経過した所迄、その概要を述べた。その日記の「下の巻」

七月二日早朝、一の嶽（二四三米）に登る。島の峯三つ、特に白嶽が白い。対馬を遠望。新羅（朝鮮）は見えるような、見えないような。

○言さへぐ高麗のこしきも天皇のやっことなりて仕へまつりし

そのほか、壱岐の島が見えた。

此の島の神は汚穢を忌みたまふ。

給うので、用を足せば忽ち狂乱するという。よって竹筒を持って歩く。

四日、せみ鯨見ゆ。漁師らに鯨とりの話を聞いて旅情を慰めた。

五日、朝鮮から長い泛子（うけ）が流れ着く。切って花瓶にした。

六日、漁師ら、鰒を取る。青光りのする真珠を手に入れた。

○吾はもよ白玉得たり皆人の得がてにすとふ白玉得たり。

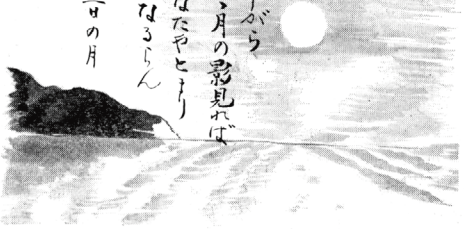
七日、夜来の風に藻が寄せた。

○あやなくも来よる玉藻かうつくしみなれにたぐへむ妹もあらなくに。

十日、漁師ら大島に帰る。そろそろ自分達も動務交替をしようと思うが、神占の結果神意のままにまに今暫く滞島することとする。

この島は「かしこくあやしとおもふことも」あるのでご心。

古来「不言島」（いはずのしま）といわれる。



十一日、白嶽の下で釣をした。白嶽の北方には「備呂」多し。

動務交替船の来るのが待ち遠しい。帰る日近き今頃になって島の「忌詞」（いみことば）が少し解って来た。しかし古語は消滅している。

十五日、今宵清し。海の底から出るように見える。始めての経験。

○よもすがら流るる月の影見れば浪のあなたやとまりなるらん。

二十二日、午後二時、遥に交替船見ゆ。午後四時着島。あと一隻、一里ばかり沖にいると見えたが、俄に北風が吹いて海上が荒れた。舟子らが松火をあげて呼んだが、分らない。遭難したのではないか。夜が更けるにつれて浪の音が万雷のように響く。夜中の十二時頃、空少し晴れて月光が射した。と、悲しげな声がする。それっ、と又火をあげて見ると、九死に一生を得た舟が着島した。舟人らは返事もしないで唯泣くばかり「著くも待つも悦びあへり」

二十三日、平穏だが、夕べのことがあるので帰る準備ができない。

二十四日舟出。二三里ばかり出た所で「風あしとて」引き返す。

二十五日、浪高し、海浜に参籠。

二十九日、朝方より北東の順風。十時舟出。五里ばかり出た処で強風となった。迫手なので安心、午後四時大島着。先ず中津宮参拝。

八月一日、勝浦に渡る。一里半ばかり歩いて田島の辺津宮に参拝した。途中、鐘岬の景色が美しい「田島の社は神湊の巽一里にあり、宮所は山あいの田の中に在り。」

参拝後数々の社記を拝観した。

二日、大島見物。

○吾もみつ人にも告げん宗像の皇御神の踏みしあと所

三日、早朝舟出、正午、相島着。

四日、髪くしけずり、衣服を改む。午前十時舟出。正午荒津崎着。先ず国主に報告。家路を辿る頃はもう黄昏であった。庭や家居のたたずまいにも春秋をへだてたような気がする程であった。